

正宗白鳥

菊池寬論

菊池寬論

菊池寛君を論ずるのは現代を論ずることである。この雑多紛々の現代に於て、ある一人を以て現代の標本とすることは困難であつて、範圍を文壇に限つても、現代を背負つた標本的人物はそこらに散在しているようであつて、特に一人を選び出すことは困難である。

しかし、今日の私は、多く躊躇するところなく、菊池君をもつて好個の現代の代表者としようと思つている。私は彼れに於てよく現代の影を見ている。現代は絶えず

動揺している。明日はこういう風が吹くか知れない。従って、私の菊池君に対する評価は、明日の日どう変わるかも知れないが、今日の彼れは、よく日本の現代を反映している。どちらかと云えばいい意味で日本の現代を代表していると云っていい。よくも悪くも現代に無関心で生存していられない私は、菊池君についても無関心でいられない訳である。

最近の文壇人のうちでは、故芥川と、久米・菊池の両氏とに、私は、いろいろな意味で興味を寄せていた。私は、年齢の差違のためか、この三氏に対して、羨望嫉妬

憎悪あるいは偏愛、仲間鼻肩などの私情をまじえずして、その述作を味い、その行動を注視していられるのである。

他の二氏のこととは暫く置く。菊池君は素直に現実を受入れる人である。現実に対して相当に敏感な人である。

外形も精神も今の日本に生きていると云った感じが生々としている人である。彼れの述作は、そういう感じの率直な表白である。日常の行動も多分そうであろうと思われるが、社会民衆党（今度の選挙に際して、そんな名前の党派のあることを私ははじめて知ったのであるが）の一員として、第一回の普選の代議士候補に立ったことも、

氏の行動として、ふさわしく私に思われる。氏が落選したことによって、「現代の日本の代表者」たるに価いしなかつたと見倣すのは、最高点の投票数を得たと云われる高木正年氏を、「現代の日本の最高の代表者」たるに価いしていると見倣すのと同様に、無論皮相な考えである。菊池君は、民政党にでも加入して選挙に立っていたなら、官選の榮譽を得たであろうし、彼自身の志している出版法の改正や著作権擁護の法案成立のためにも、都合がよかつたであろうのに、氏は易きを去って難きに就いた。しかし、そこに、現代的良心の保持者たる氏の面

目が見られるのである。

安部磯雄先生が社会民衆党の巨頭であることも、私は、今度はじめに知った。安部先生と私とは、この世に於て多少の因縁が繋がっていないことはない。私は、年少の頃（明治二十七八年の頃）備前岡山の郊外にあった薇陽學院という宣教師経営の私塾に半年ばかり通学して、傍ら県立の病院へ通っていた。（当時の印象は、「地獄」という短篇に書いたことがある）その学校の校長は、安部先生であったが、神学研究の目的で米国に留学されていた。私の入学後何箇月かして帰朝されたので、私達は

多くの期待をもって先生を、岡山の停留場に迎えた。私は、学校では先生の教授を受けなかったが、市内の教会堂に於ておりおり先生の説教や講演を聴いた。社会主義らしい意見を、私はその時はじめて耳に入れた筈であったが、特別に記憶に留まるほどの感激は受けなかった。

間もなく私は年少の憂鬱に困じて退学したが、一二年後にその学校も閉鎖されることになったのであった。校長たる安部先生が、在米中新神学にかぶれて、基督教の正統的信仰を失ったために、宣教師と意見が合わなくなったのが、学校閉鎖の一つの原因であると云われていた。

私が上京して早稲田の学堂に通学していた間に、安部先生も上京された。一団の同志とユニテリアンの教旨を宣伝されだしたが、当時の私は、宗教が塩気を失ってしまつたような神秘性を欠いた、淡々水の如き常識的なユニテリアンを蔑視していた。（今思うに、無産党中の社会民衆党は、宗教のうちのユニテリアンのようなものはあるまいか。）

先生は、私の在学中早稲田に教鞭を執られるようになって、私達のクラスでも英語の一課目を受持たれたのであつたが、まだ先生の人格や学識を知らなかつた学生は、

どういうわけだったか、先生を毛嫌いして、最初の授業時間に、私など数名の外はその教室に入らなかつた。学生に嫌われたことを知った先生は、直ぐに教室を出て、それっきり受持教師は変更された。それで、後年安部先生が早稲田の学生間に旺盛なる人望を得られたことを知って、私は意外に感じた。

爾来数十年、私は軽井沢避暑中に、彼方此方の途上で、幾度か行会って、お辞儀をする外、先生に面接したことはなかつた。先生がいかなる社会主義行動をしていられたか、そういうことに興味のなかつた私は殆んど知らな

かった。ただ羽仁吉一氏をおりおり訪問した時世間ばなしのうちに、安部先生の家庭についても、多少耳にしたことがあった。羽仁氏の令嬢が、安部さんの子女××さんとは、神様は信じないけれど、お父さんを信じると云っていたと話したのが、私には奇異に感ぜられるとともに、先生の家庭ではそうだろうと思われた。先生はかつて、ある雑誌に、「私は妻君を尊敬する」と云っていられた。夫が妻を尊敬し、子が父を神の如く信じることは、私が日常目睹している周囲の家庭では多く見られない現象である。

こういう有徳の人物が国民の代表者として議政壇上に立つことは喜ぶべきことである。選挙前後の先生の人気の盛んな所以である。しかし、翻って考うるに、議会は現実の国人の生活に直ちに影響を及ぼすような言論行動の舞台であるとする、温良有徳の人物ということとは、必ずしも代表者として最高の条件であるとは云えないのではあるまいか。私は、先生の政治上の主義主張については、詳しくは知らないのであるが、雑誌上でありおり瞥見したところに依ると、産児制限論者であるとともに、財産の制限論者であるらしい。土地国有主義を抱いてい

るらしい。土地の私有禁止を説いたり、個人の私有財産を幾干に止めようと説いているのを、私は何処かで読んだことがある。……ところで、他の無産党候補者を選挙した人々は、どういう人々であつたか知らないが、安部先生の応援者及び投票者は、必ずしも無産者ばかりではなかつたらしい。財産を有し、土地を有し、また出来ることなら、自己の財産を殖やし、所有土地をも殖やしたいと、人類共通の慾心から脱却してはいそうでない人々も、安部先生を自分達の代表者として昇ぎ上げたようである。私は、そこに現代を見るのである。現代的良心を

見るのである。安値、浅薄なる、人間的良心を見るのである。若し、安部磯雄先生の属する党派が政友派や民政派のように有力であつて、議員の過半数を占める恐れがあつて、安部先生も当選の暁には、自から内閣を組織し総理大臣となつて、その抱懐せる土地私有禁止などを、直ちに実行し得られるようであつたなら、どうだろうか？　そういう右か左かに自己の運が左右される場合にでも、先生の投票者は挙つて先生を投票したであらうか。どうせ無産党が議会に多数を占める恐れはないのだから、自分達は、新聞雑誌などで新しい進んだ思想らしく説かれて、

現代の知識階級の流行となっている主義の所有者たる先生に一票を投じて、現代的良心の満足を得、先生の当選の報を新聞に読んだ時、明日から土地私有禁止実行などの不安に襲われる必要なく、普選第一回の進歩せる選挙者であるという快感のみを味い得られるのではあるまいか。

全体無産者は有産者を打倒して自から有産者たる幸福を占領したいのが、人間性の至極である。人間は精神的にも物質的にも、他に優越しているということに於て自己の幸福を感じるので、婦女子でも、万人が万人同じ衣

服を着るようだったら、それがどんなに美服であっても幸福を感じないに違いない。選挙でも、主義そのものに即しなくつても、勝敗ということだけで、大勢が興味を覚えるではないか。

筆が横道に外れたが、ここらで、本題の菊池寛論に返ることにする。

改めて云う。菊池君は素直に、現実を受入れる人である。現代的良心の所有者である。帝国議会の一員となって實際の政治に参与したいという、在来の引込思案の文人氣質とは違った勇猛心を起しても、民政党へは加入しなか

った。そして、氏は、近き将末に於て、社会組織が急変して、生活が平等になつて、流行作家も、贅沢が出来なくなるであろうと、素直に考えているらしい。(私はそう考えていない。通俗的流行作家は、これからますます栄えて、浮世の栄華を極めるようになるのではあるまいか)

封建制度が崩壊しようとも、資本主義が滅亡しようとも、生きかわり死にかわり、人間の所有慾や愛慾が、蛇の執念の如く、何等かの形に於て、人類が地上に存在する限り威を揮わないで置くものか。周囲の事情によつて

文学そのものが衰頹すれば兎に角、そうでない限りは、文学者の生活はますます不平等になって、時好に投じた作家は、ますます贅沢を味い得られるであろう。

菊池君は、文壇人の所有慾満足のために相応に力を尽した人である。文芸家協会を設立されたのも、最も多く氏の力によるのであろう。戯曲の上演料が得られるようになったのも、何年か前から、急激に原稿料が騰貴するようになったのも、菊池君などがその道を拓いたのではないかと思われる。そして、氏に対して悪弊を放つ人々も、原稿料が値上されたり、上演料が取れたりすること

には反対しそうでない。この頃円本発行書店が、頻りに芸術家の作品を極度に商品扱いしているが、商品扱いされて予想外の利益を得る作家は大して洩面をつくっていないらしい。それは今日の作家が特に所有慾に目が眩みだしたのではなくって、以前の作者は、環境が彼等をして強いて清貧に安んぜさせようになつていたのである。

そして、菊池君は拘りなく現代に応じて行く。芸術的気取りに捉われないで、現代をありのままに享樂して行く。そういう点では、育ちが育ちだけに説教者めいた安

部先生よりも、現代の代表者として衆議院議員の最適任者であるかも知れない。

菊池君は、人として現代の代表者であるとともに、作家としても現文壇の代表者である。この頃盛んに宣伝されている新潮社の「長篇小説集」でも、春陽堂の「戯曲全集」でも、先ずその第一回配本に菊池寛集を撰んでいゝるのによつても、氏が現代の代表的作家として世間から認められていることが察せられる。

私は、今度、氏の長篇通俗小説「新珠」を通読した。それから、大正九年輕井沢に避暑していた頃、日々新聞

で何回かを走り読みした「真珠夫人」と、先年、「婦女界」で二三回だけ読んだ「受難華」とを、飛び飛びに読み直した。そのうちで、「新珠」が作者得意の作ではないかと思われる。

しかし、現代の文壇に跋扈している所謂通俗小説なるものを、殆んど一つも読んだことのなかった私は、「新珠」一巻を読むにも苦しい忍耐を要した。老いて、少女愛玩の小説に親しむことの如何に難きかを知った。

それでは、拙劣な作品であるかと云うと、決してそうではない。私などは無論こういうものは、書こうたつて

書けないだろうし、他の知名な通俗作家達の作名の中にも、このくらいなもの、そう手易く見つからないのはあるまいかと、私はまだ広く読まないさきから予想している。

通俗的見地から批判すると、「新珠」は、用意周到を極めた作品である。日本画の大家の未亡人が、子女の不名誉な妊娠についても、さして心を労しないで、相手の男を勝手に出入させたり、姉娘の行方不明を一年もほったらかして平気でいたり、ことに、良家の三人の姉妹が、芸者か娼妓かの如く、日常の仕事のように、互いに色恋

の競争をしたり、色っぽい話を、姉妹同志で臆面もなくし合ったりするなんか、私には不可解な世界として映ずるのであるが、ここらが頭脳未発達な婦女子の読物たる所以であろうと、讓歩して見ると、全篇の構図、人物の配置、会話の呼吸など、用意周到を極めている。三人の姉妹はそれぞれに性格を異にして、中心の男性たる不良青年に対する態度が順々に変わって行くところなんか、思いつき妙を得て、年少の読者を釣って行くのであろう。モウパッサンなんかは、こういう世相の描写は手に入つたもので、短篇では、伊太利か何処かへ旅した蕩児が、

最初娘のうちの年上の女を手に入れ、その次の旅には次の女を誘惑し、まだ一人若いのが残っていると、ひそかに楽しんでいる気持がスツキリと書かれてあったが、「新珠」には、不良青年に配するに、ある殉情の男を以てしている。婦女子の読者はこうでなければ、満足しないのであろう。

私は、読みながら、数十年前に読んだ「魔風恋風」や「青春」を思い出して、時代の相違を考えた。楽々と書きこなしで、ギゴチないところのないのは、「新珠」の方が如上の二長篇に傑れている。風葉の「青春」のうち「あ

あなたは天才だわ」と、女に褒められて、「僕が天才？」と、男が目を見張るところなんか、私は若い頃に読んでさえ、胸の悪くなるくらいいや味に感じたのであったが、「新珠」では、いや味になりそうなのところが、割合にすつきりと書き流されている。

現代児菊池君は、現代の若い女性の喜びそうなことをよく知っていて、よくそれを書き現わしている。しかも、空々しい筆や皮肉な筆を用いないで、熱心に書いていく。 「じゃ、つまりお姉さまのおっしやることは、女子教育家などが云っていることと同じね。つまり処女時代

の貞操を尊重せよと云うことね。ありがとう。お姉さまのお言葉を有難く聴いて置くわ。でも、妾の考えは少し違ってよ。妾、本当に愛する人が出来て、またその人が妾を、本当に愛していて呉れるのなら妾凡てを捧げるつもりよ。妾、お姉さまにそれだけは云って置きたいわ」

「魔風恋風」や「青春」には見つからなかった台詞であって、現代の一部の若い婦女子の拍手喝采を得るところである。

「耻しいなんて、生涯の大事だわ。羞耻のために生涯の大事をあやまるなんて、そりゃ旧式の日本婦人のことよ」

「女性全体から選ばれて、色魔的な男性を懲す選手になつたつもりでいますの」

その他、さまざまな、現代の若い女性の拍手を促すような台詞が散乱している。

しからば、私のような現代女性について知るところの少ないものは、「新珠」を読んで、大に啓発されたであろうかと考えるのに、「今の婦女子はこういう小説を愛読している」という点で、現代の女性の心理が想像されるばかりで、女性そのものの本態や人生の真相については、さして得るところがなかった。こんなに長つたらし

なくなつて、従つて時間を浪費しないで読み得られた同じ作者の幾つかの短篇小説や戯曲ほどの感銘は得られなかつた。

「人間の業は、はてしなく巡転するものである。人に負わせた苦しみは、いつの間にか自分の身に巡転して来る」など、作者の人生に向つた観察は、正しくつても、筆が皮相を撫でて深く抉つたところはなさそうである。私をして倦怠を覚えさせるほどに長つたらしい癖に、姉妹の嫉妬煩悶が、少しも熱火を帯びて現われていない。上すべりの綺麗事に過ぎぬ感じがある。これは、婦女子を喜

ばせるためにわざとそういう筆使いをしたのではなくって、作者自身の心境がそうなのではあるまいか。

しかし、現代の才人である菊池君の筆は、さすがに他の多くの作家の如く鈍昧でない。「新珠」のうちにも、清新な形容語や清新な警句がところどころに目に触れるのである。

「真珠夫人」は熟読しないから、充分な批評は出来ないが、この妖婦振りにはひどく表面的のように感ぜられた。妖婦と云えば、有島君の「或る女」は圧力の強い作品である。私は、去年軽井沢でこの長篇を読耽って感歎した。

かくてこそ長篇の長篇たる価値があるのである。

昔、國木田獨歩が「破戒」を読んで、「おれならこんなものは、三四十枚で書く」と傲語した。これは例の空気燄であつたが、小説でも何でも、短かくって済むものなら短いのに越したことはないのである。そこには議論の余地のない訳である。……（私が「新珠」を読んで、「おれならこんなものは、三四十枚のうちに書き込んで見せる」と自惚れているかの如く邪推する勿れ、私は、はじめから「新珠」のようなものは書けないと降参している）

何年か前、武林無想庵君が、最初の洋行から帰って来て二の宮に仮寓していた時分、一日私を訪ねて来て、歐洲の状況を話して呉れたが、彼れは、フランスの現文壇の風潮は、性慾の極端な描写とコンミニズムの主張であると云っていた。そして、彼れは自分でその異国の流行にかぶれて、真似をする気になったのか、頻りに、○○○付きでなければ誌上に掲載されないような小説を、得意になつて書きなぐり、かたはむ、コンミニズムの信者気取りの雑文を書き散らしていた。ところが、再度の洋行

によつて、現実の刺戟を実感してからは、態度が一変して、西洋の真似事でない自己の眞実を吐露しなければならなくなつた。人間は聞き嚙りの思想や流行の主義から脱却した時に、自己の持っている人間本来の姿が力づくであらわれるのである。

今「婦女界」三月号を開けて見ると、菊池君は、その恋愛観のうちに、「人生恋すれば憂患多し恋いせざるも亦憂患多し」と、それを痛切に感じているらしく書いている。どちらに転んだつて憂患の多い人生である。それ

ならば、恋愛に向つてでも戦闘に向つても、その渦中に投じて歓喜でも憂患でも心にふりかかつて来るものを味うのが、男子の面目であるかも知れない。現日本の文学者のうちでは菊池君などに最も多くその意味がありそうである。可なりの戦闘性を有し、享樂慾に富み、親分肌もあり、楽天的分子も可なりに持っている。先日選挙の際、第一回の政見発表演説の終つたあと、銀座のカフェー「エスキモー」で、私は菊池・山本両氏と座をまじえて紅茶を飲んだが、その時、山本有三君が傍からくよくよ気をつかつて選挙の結果を悲観しているのに引かえ、

菊池君は悠然として安んじていた。これぼっちの度胸でも今の文壇人には珍らしい。

代議士には落選しても、これだけの世界的声望を脊負っている菊池君には、何か目醒ましいことがやれそうである。またやるのは今のうちだ。世俗の声望は朝夕を計られず、……

菊池君は、京都で上田博士の指導を受けた人であるに
関わらず、最初から純芸術の道を進むような素質は持っ
ていなかった。シヨウの感化を受けたと、自から云って
いるように俗界に関心しないでいられないのである。そ

れが、過去十年、菊池君が世に出て以来の時世に適應していた。こういう世間的興味を多く持った文人が勢いを得るような時代になっていたのだ。も少し早かったなら、菊池君なども、他の多くの赤門出身文士のように、数年にして文筆を投じて学校の先生になったかも知れなかった。も少し遅かったなら、菊池君は初めから社会運動でもやるかも知れない。氏は運よくこの十年の時代の調子に乗ったがために、自己の文学的天分を過分に燦かすことが出来た。

余論

以上の雑感を書き終ったあとで、余暇があったので、新潮社発行の「現代小説全集」中の「菊池寛集」を取出して、ところどころ読んだ。一度読んだことのあるものばかりであるが、氏の作品は頭を疲らせないでスラスラと読める。現代に持囃された原因は、こういう特徴があるためであろう。少なくとも、「新珠」や「受難華」を読む時のような退屈を、私は感じないでいられた。「無

名作家の日記」「葬式に行かぬ訳」「友と友との間」など、文壇へ出るまでの苦心が如実に書かれているので面白い。そして、こういう初期の物には作者の人のよさがよく現われている。こういう作品に有り勝ちないやみがない。

無論これ等の作品は、芸術としてそう傑れたものではないが、兎に角、事実の記録であるから、見飽がしないのである。「芸術品には非常に高い要求をしているから、そこいら中にある小説は、此要求を充たすに足りない」と、森鷗外が云っている通り、単なる自己の日常生活の

記録たるに留まっている小説は、我々の芸術慾を満たすに足りないのであるが、しかし貧弱な空想で捏ち上げられた小説よりは、遙かに読むに価している。私は、この頃ある社の依頼により、懸賞募集小説の選抜をしているが、実際の記録らしい小説は、いかに小説が幼稚であっても、世の中にはこういうことがあるのかと、世相について一つ学んだ感じがされるのであるが、幼稚な頭で文章や趣向ばかり凝ったつもりの、所謂「創作」なるものは、読むに堪えないのである。書く方も読む方も時間潰しで、こういう創作は全く無用な存在のように思われる。

……私は投書を読んで、今更のようにそう感じているが、菊池君の如き現代最大の流行作家の作品を読んでさえ、そういう感じのしないことはない。

故上田敏氏のこと、菊池君の初期の作品には屢々現われているが、「友と友との間」のある一節に、「あの人はほんとうに偉かったでしょうかね」との質問に対して、松木さん（夏目漱石氏）は暫らく考えてから、「そうだね。博く知っていた事は、確に博く知っていたね。が、その博く涉って居るある部分を押しで行くと、それがどれ位深いかは、一寸問題だがね」と云っている。

漱石氏の評語ほどあつて、上田氏を評して要を得てゐる。間口の広い人が奥行の浅いのは当然である。上田氏は学問の深い人ではなかつたであらう。しかし今私は此一節を読みながらふと考えた……漱石氏は敏氏よりも、芸術についてどれほど深く入つていたのであらうか。ある特殊の人物や時代について一生を捧げるくらいに深く研究することは専門的学者の態度であらうが、自己の心で芸術を味得するのを最高の目的とするためには、一所に停滞し、部分的に拘泥する必要はないのである。上田氏だつて西欧の詩歌の鑑賞に於ては、夏目氏に負けなかつた。

ったであろう。

西洋の詩の味いは、言語の関係から、日本人には分らないと、芥川君なども云っているが、しかし、分る分らないは程度問題である。私などは西洋の詩を愛読している。日本の和歌や俳句にも勝った興味を感じることもある。私はそれでいいと思っている。私は、教壇に立って外国の詩を講じようとする自信はない。しかし、一知半解にしる、自分だけで興味を感じ、自分の心の糧としているのは差支えないと思っっている。はじめから分らないと極めて、強いて外国の詩に目をつぶる必要はないと思

っている。

短かくて取っつき易きためでもあるが、私は、この頃は、外国のいろいろな詩人のものをあれやこれやと読みかじって、寂寥たる心境の慰めとしているので、こういうことに言及した。

日本文学電子図書館

菊池寛論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第6巻、新潮社

昭和40年8月25日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館